

Free & Easy



T A T O O



B A G



AUGUST 2008, Vol.11 No.118

880 YEN

じっくり
いいもの
選びたい

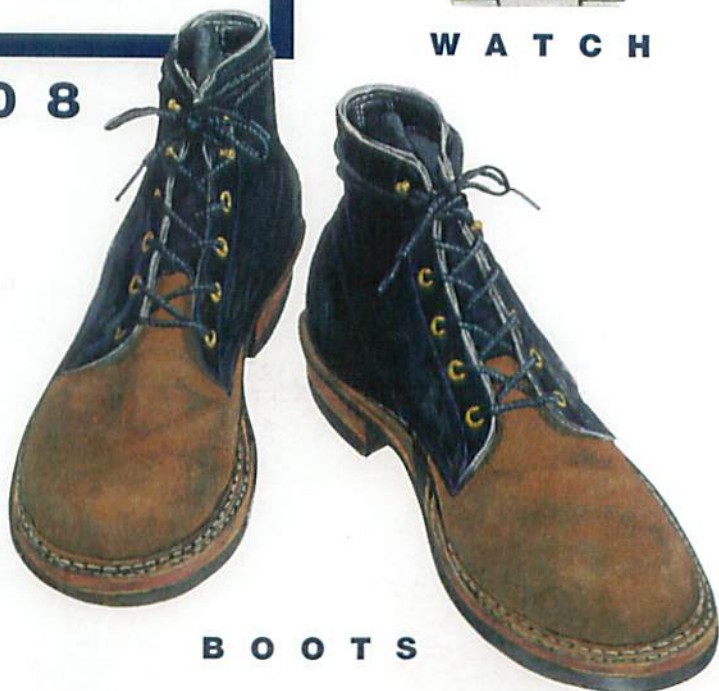


W A T C H

2008



V I N T A G E O U T E R



B O O T S



左:18万9000円、右:17万6400円、奥:12万8100円(山下眼鏡店/山下眼鏡工房)



↑テンプレの竹は捻りと微妙なカーブがつけられていて、顔に自然にフィットする。他の眼鏡では味わったことのない掛け心地だ



↑鉄と竹は、開閉を考慮して精密に組み合わされている。普通の眼鏡では決して使えない2つの素材が見事に融合している



↑菜種油を何度も塗っては焼き付けることで黒く鈍い光を放つ質感に仕上げている。掛け心地がよく、鉄の重さは感じさせない

素材	★★★★★
伝統	★★★★★
男っぷり	★★★★★
取り入れ易さ	★★★★★
浮世離れ	★★★★★

計 ★ 22

山下眼鏡工場の江戸金枠眼鏡は、今回のエントリーの中では異質である。何故なら道具であると同時にアートとしての性格を持つからだ。その点をこの評価基準で測ることは出来ない。素材、技術ともに究極を行き、道具としての新たな次元に入っているのだ

道具と芸術の境界をまたいだ眼鏡

日本における眼鏡の歴史は古く、江戸町人文化が華やかなりし頃には、すでに庶民にも眼鏡が普及していた。当時、精度と掛け心地に優れた金銀製の眼鏡を作る仕事は「江戸金枠」と呼ばれ、職人たちが腕を振るった。しかし、近代工業化の波により、その技術は途絶えてしまう。その江戸金枠を現代に甦らせたのが、山下眼鏡工場のヤマシタリョウ氏。伝統の技法で素材となる金属を鍛造・成形し、小さなネジに至るまですべての部品を一から手造りする。そうして見たこともない眼鏡の芸術作品が完成する。写真は「アイアンバンブー」と名付けられた鉄と竹の眼鏡。菜種油を繰り返し焼き付けた鉄製の枠にしなやかな竹を合わせた。ハツとする粋な佇まい、オツと驚く軽い掛け心地。江戸の技術は現代の感性と出会い再び花開いた。



↑繊細な刺し子織りの生地を使った合切袋。高虎商店では他にも半纏や手ぬぐいなどの染物を作っている



↑サイドに縫い目が無く筒状になっているのが酒袋の特徴。酒粕で目が詰まり多少の防水性もある。現在では入手困難な素材である



↑見えにくいところへのこだわりもうれしい。裏地の織生地も様々な色柄があるので、表の絵柄と合わせて好みの一品を選びたい

素材	★★★★★
伝統	★★★★★
男っぷり	★★★★★
取り入れ易さ	★★★★★
浮世離れ	★★★★★

計 ★ 21

小物入れとして使うのもいいし、ひもを長くして近所を散歩する時のバッグにしてもいい。汎用性の高いアイテムである。高橋欣也氏がデザインした大皿で酒落の効いた柄はラキッドなスタイルにもしっくりはまるはずだ

洒落に感じる江戸の粋

「一切合財を入れる」という意味から名づけられた「合切袋」は、人と違うモノを持つことを好む江戸っ子気質が生み出した逸品である。浜町の染元・高虎商店の二代目・高橋欣也氏が作る合切袋は、酒落が効いて特にユニークだ。右の骸骨柄は、「ガイコツ人(パイプを煙えたスネの長い外国人)の骨休め」、中央の刺し子織りのものには、「罎」と「輪」と「ぬ」で「かまわぬ」と読ませる江戸から伝わる意匠が入り、左の酒を絞るときに使う酒袋で作った合切袋は家紋が9つ入って「文句(もんく)」という具合。裏地にもこだわりがあり、柄合わせを一枚ずつ変えて織生地を張っている。そのためどれも一点物の特別感が味わえるというわけだ。人と同じが大嫌いという江戸っ子気質のあなたにふさわしい、ちょっと「いなせ」な和のバッグである。

ENTRY#6 濱學 高虎 合切袋



左:酒袋合切袋 1万7325円、中央:刺し子織り合切袋 1万8900円、右:合切袋 3675円

ENTRY#7 日吉屋 特選番傘 1.9尺



2万6250円(日吉屋)



↑洋傘は閉じたときに骨が内側に入るが、和傘は外側に出るので、カッチリと収まり見栄えが良い。色は他に伝統的な白、赤もある



↑番傘を外から見ると、実に洗練のある佇まいである。こんな傘があれば雨の日が待ち遠しくなってもしかたあるまい



↑大きさは1.9尺(直径約1.1m)。竹製の柄の先は、48本の骨目に分かれ、傘を支える。ばらばらという雨音の響きが情緒を醸し出す

素材	★★★★★
伝統	★★★★★
男っぷり	★★★★★
取り入れ易さ	★★★★★
浮世離れ	★★★★★

計 ★ 21

なかなか馴染みの無い番傘であるが、実際に手にとってみるとその美しさに惚れ惚れし、思わず欲しくなってしまう。だが、ラフな首飾りに合わせるのとは考えもの、やはりヒシッとキメた和紙で差してこそ良さが出る。浮世を忘れさせてくれる逸品だ

和紙と竹が織りなす美

まず、実際に竹でできた柄を握って、この重厚感を味わってみてほしい。重すぎず、軽すぎない絶妙な重みで、安定感がある。そして、開くと鮮やかに目に飛び込んでくる、細く裂かれた野しいまでの竹製の骨。その骨の間を縫うように張られているのは、上質な越前和紙だ。まさに、天然素材を組み立てられた「芸術品」である。番傘は、江戸時代から戦後あたりまで日常的に使われていた傘。表面は亜麻仁油でしっかり防水加工してあるので、普段使いも十分可能だ。製造元は、江戸後期創業、茶道家元御用達の野点傘で定評のある京和傘の老舗、日吉屋。五代目当主である西堀精太郎氏が、伝統手法を用いて、ひとつひとつ手づくりしている。洋傘とは違ったシャープで粋なシルエットで、雨の町並みを闊歩するのにも一興だ。